

ショック状態の救急搬送を議論

室蘭で医師ら勉強会

医師や救急隊員の情報交換を図る救急症例検討会が製鉄記念室蘭病院で開かれ、ショック状態に陥った患者搬送の実例などを話し合った。

同病院の医師、室蘭、登別、白老、西胆振行政事務組合の各消防本部の救急隊員ら約90人が参加し19日開催した。同病院の高橋弘・循環器内科長は、意識障害や尿量減少といったショック状態の診断基準を説明

医師や救急救命士が搬送例の情報交換をした救急症例検討会

し、「兆候をいち早く感じ取ることが重要だ」と強調した。

症例発表では、白老町消

防本部が、70代男性が搬送中にショック状態に陥った例を報告。救急車の限られた資機材で対応する難しさがあったとした。

また、同病院の前田征洋院長は、昨年室蘭、登別両

消防本部に導入した患者の心電図のデータを救急車から病院に送る「クラウド型12誘導心電図伝送システム」を配備、増設するよう各本部に要請した。

(田中雅久)

